

編集者側からみた論文査読に関する雑感

田原 樹

(国立情報学研究所, 科学技術振興機構さきがけ)

ある日筆者のもとに一通のメールが届き、ある原著論文誌の編集者として推薦するから Curriculum Vitae を送ってほしい、という依頼を受けました。差出人がデジタルホログラフィーの分野で著名な教授であったこと、顔を覚えていただき国際会議でお話する機会をいただいていたこと、その論文誌のことなどを思い返し、引き受けることにしました。そして一年が経ち、投稿者側の立場だけではわからなかったことを多く学びましたので、関係する方々にご迷惑のかからない範囲で会員の方々にお伝えできることがあればと思筆をとることにしました。本稿にて述べる種々の流れはあくまでも一つの論文誌の例ですので、ご参考程度にお読みいただけますと幸いです。

1. 投稿論文に対する編集者、査読者の選定

原稿が論文誌に投稿されると、まずその原稿の査読手続きを担当する編集者が選定されます。担当編集者の決定は、より上位の編集者によって行われているようです。担当編集者の選定や査読手続きを進めるための主たる判断材料となるのが、原稿と Cover Letter です。そのため、Cover Letter は適切な担当編集者の選定に重要な役割を果たすものと考えられます。担当編集者は、上位の編集者からの指示に従い、査読手続きを進めます。担当編集者も同様に原稿、Cover Letter を読み、投稿者推薦の査読者リストを見ながら査読者を選定します。担当編集者が査読者に原稿を回さずに掲載不可の判断を行うこともあります。論文の内容を適切に評価できる査読者を探すのはなかなか難しく、編集局のさまざまなサポートや投稿者からの情報を手掛かりに、近い研究を行う研究者にコンタクトを取ります。査読を引き受けていただけるかどうかは各研究者の都合によりますが、複数人の研究者が原稿を査読するように手配します。所定の人数の査読者が決まるまでや、査読者から報告書が提出されるまでの時間はケースバイケースであるため、査読結果を投稿者に返すまでの時間は、原稿ごとによってもばらつきが出ざるを得ないところがあります。

余談ですが、査読者推薦リストを挙げない投稿者が時折

みられます。適切な査読者推薦は査読手続きを円滑にし、投稿者にとって恩恵のあることですので、機会があれば挙げておいて損はないといえます。ただし、誰が投稿者と共著論文を出しているか、編集局のシステムを通じて担当編集者が知ることもあるため、査読者の推薦にはご注意願いたく思います。

2. 査読者の報告書に基づく判断

各査読者から報告書が集まると、担当編集者が原稿の掲載可能性を判断します。査読者間で意見が同様である場合、異なる場合、いずれもあります。最終的な判断の責任は担当編集者が負います。また、担当編集者は判断の後、査読者の報告の質を編集局にフィードバックします。論文誌のスコープに加え、査読者による客観的証拠に基づいた新規性・有用性の肯定ないし否定や指摘は、編集者にとって掲載可否の重要な判断材料であるため、価値の高い報告書を提出した査読者に対しては高い評価を与えます。このフィードバックは査読者の履歴として蓄積されます。高い頻度で査読依頼が来る方は、それだけ編集者たちから評価され、頼りにされている証拠といえます。

担当編集者の掲載不可の判断に対しては投稿者が異議を申し立てることもあり、その際には他の適した査読者を探し、報告を待ちます。

3. 二重投稿嫌疑の際の対応

この一年で特に印象深い経験として、二重投稿疑惑がありました。筆者の担当した論文で、査読者の一人から、他の論文誌からもほとんど同じ論文の査読依頼が来ているとの指摘を受け、見ると確かにほぼ同一でした。この後、編集局で今後の対応が審議され、方針が定まった時点で投稿者に理由とともに掲載不可の旨が伝えられました。

この過程において、二論文誌の編集局同士でやり取りが行われることが特徴的で、経緯が詳細に調査されます。投稿者にも自身の名誉のために経緯説明が求められ、各経緯を総合して編集局が検討、対応を繰り返す、二論文誌間で

密なやり取りが行われます。そして一つの結論が下され、案件終了となります。

今回のケースでは、査読者の丁寧な調査と指摘、論文誌間の綿密かつ慎重な対応により、望ましくない結末を未然に防ぐことができました。関係者の方々に厚く感謝いたします。

おわりに

原著論文の質を担保するための査読の過程は、さまざまな研究者や関係者の助け合いの上に成り立っています。筆者自身まだ駆け出しの研究者で、見知らぬ研究者からの投稿論文への対応や、お会いしたことのない研究者への査読

依頼を経て、査読手続きを進めることもしばしばあります。編集者の側に立ち、いろいろな研究分野の知り合いを国内外に増やすことは、依頼する側の立場になったときに利いてくるのだと解釈しています。また、論文投稿ではつい急ぎがちですが、原稿、Cover Letter、査読者推薦などの一つ一つを丁寧に仕上げるのが、その後の適切な査読手続きや迅速な論文受理に繋がるのではないかと感じます。査読を引き受けてくださる方々に感謝するとともに、査読の負担をお願いすることや、査読者間で意見が割れたときの対応、掲載不可の際に判断を投稿者に伝えることなど、編集者の難しさを改めて考えさせられます。